

1. 超高齢社会の暮らしと環境の課題

1-1 超高齢社会とは

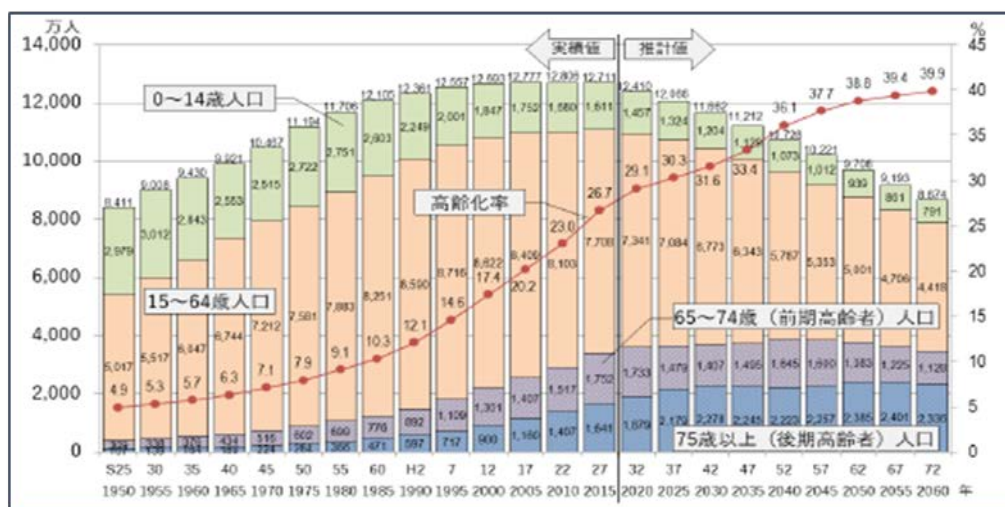
国連世界保健機構（WHO）では、「高齢者」を65歳以上と定義しています。さらに日本の医療制度では、65歳以上75歳未満を「前期高齢者」、75歳以上を「後期高齢者」としています。

「高齢化率」とは、65歳以上の高齢者人口÷総人口で表されます。また、高齢者社会に関する言葉の定義は、国連世界保健機構で次のように定めています。

- ・高齢化社会：高齢化率7%～14%の社会（日本1970年に到達）
- ・高齢社会：高齢化率14%超～21%の社会（日本1994年に到達）
- ・超高齢社会：高齢化率21%を超える社会（日本2007年に到達）

日本の高齢化は現在も進行しており、2015年には団塊の世代全員が65歳以上の高齢者になりました。また2025年には団塊の世代全員が75歳以上の後期高齢者となり、医療費の急増が懸念され「2025年問題」と言われています。そして2030年には全人口の20%（5人に1人）が後期高齢者となり、約40%が65歳以上の高齢者になると推計されています。少子化と高齢化が進めば生産人口が減少し、その人たちが支える高齢者が増えるので、社会問題化しつつあります。生命寿命（生きている期間）は日本では現在も伸びつつあり、「人生100歳時代」などと言われだしています。年金支給額の減少、医療費の増大、1300兆円を超える財政赤字等多くの不安要素を日本は抱えています。2000年に始まった介護保険制度は当初月額3千円程度でしたが2025年度には8千円を超えると予想されています。今後日本の財政をコントロールするためには、消費税を上げ、社会福祉制度を後退させることが避けられないと言われています。

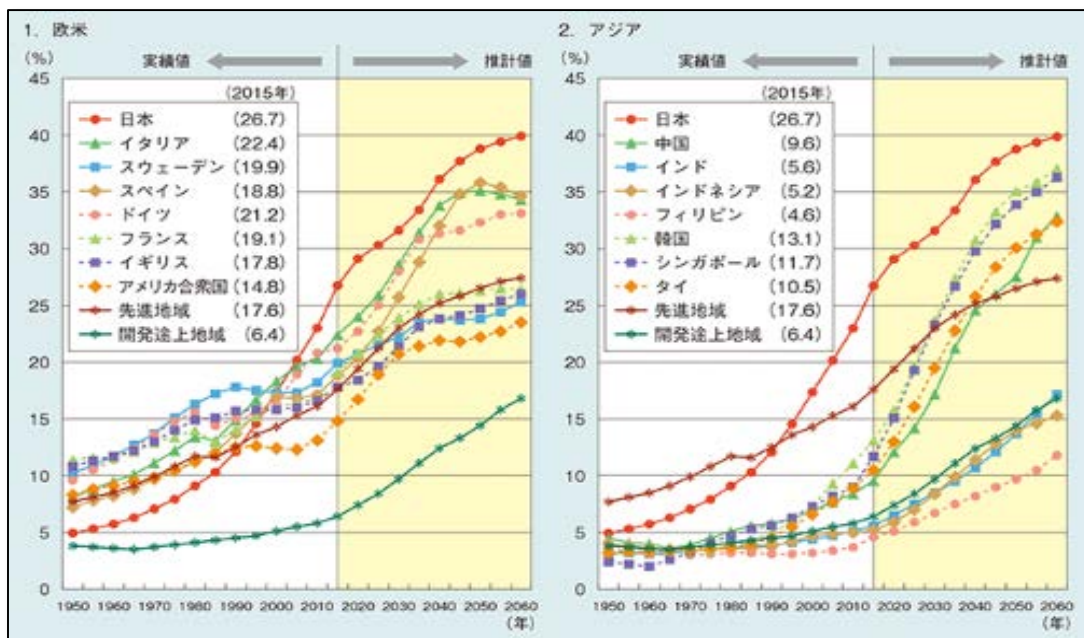
図 1-1 高齢化率の増加と生産人口の減少（出典：平成 28 年度高齢社会白書）



1-2 世界で進む高齢化現象 日本は高齢化のトップランナー

世界の人口は 2050 年には約 97 億人、2100 年には約 112 億人と推計されています（国連人口推計）。その 1 因である高齢化は世界中で進んでおり、特に日本及びヨーロッパ諸国で顕著な現象です。高齢化率では日本、伊、ギリシャ、独、ポルトガル、フィンランド、ブルガリア、スウェーデンの諸国が既に 20% を超えています。日本は高齢化率 7% から 14%（高齢化社会）にかかった年数は 24 年でした（1970 年～1994 年）。米国 72 年、独 40 年、仏は 115 年もかかり、日本の高齢化スピードがいかに速いかわかります。高齢化のスピードに関しては、日本は世界の高齢化のトップランナーとすることができます。そこで日本における今後の高齢化への対応を世界は注目しています。

図 1-2 高齢化の国際的動向



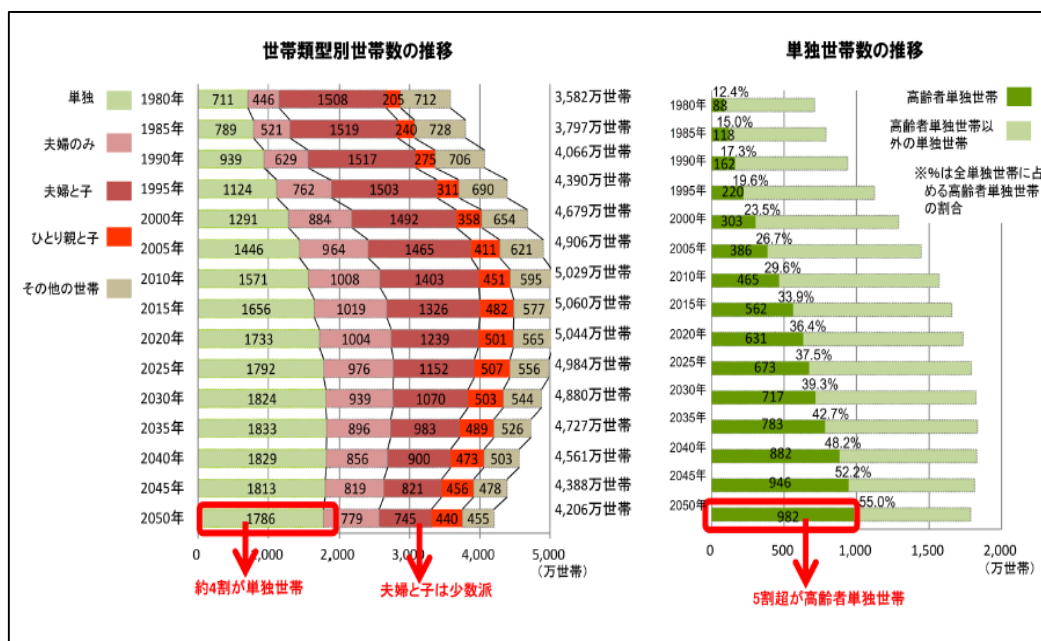
(出典：内閣府「高齢化の国際的動向」)

1-3 日本の高齢化スピードの速さがもたらすもの

高齢者を支える指数として老齢人口指数があります。老齢人口指数は 65 歳以上の人口 ÷ 15～64 歳の人口（生産人口）であらわされ、2010 年は 35.2%、2025 年には推計 48% となり、生産人口 2 人で高齢者 1 人を支える時代が到来することになります。支える人が少子化により減少し、支えられる高齢者が増加すれば、当然年金、保険、医療等の社会保障に破綻を生じかねない恐れがあります。また戦後の日本は第 1 次産業が衰退し、人口の都市への集中が進みました。そして戦前の「家制度」や「家族」に対する考え方等は大きく変わり、核家族化が進みま

した。「夫婦と子の世帯」が「単独世帯」より多いのは2005年ごろ迄で、以後単独世帯の方が多くなり、2050年には単独世帯が全世帯の約4割、その内高齢者の単独世帯が半分以上になると推計されています。超高齢社会では社会との接点が少ない「高齢者の無縁化・孤立死」が懸念されています。

図1-3 世帯類型及び単独世帯数の変化



(出典：総務省「国土の長期展望」)

1-4 超高齢社会での課題

1) 超高齢社会における3大不安要素

超高齢社会における不安要素には、急速な少子化・高齢化、生産人口の減少、産業構造の変化に伴う都市への人口集中等ありますが、経済・家計、健康と福祉、コミュニティ、扶養に対する考え方等は、かつてないスピードで大きな変化をもたらしています。

表1-1 超高齢社会における3大不安要素

	世界レベル	日本国レベル	国民・高齢者レベル
経済・家計	富裕国と貧困国との格差の拡大	社会保障制度の破綻、格差社会	年金の見直し・減少 家計逼迫、下流老人増加
健康・福祉	貧困国での病死・短命	医療保険、介護保険等の破綻	各種保険の負担増 介護と看護・孤立不安
コミュニティ	経済・軍事力の	世代間格差	ソーシャル・キャピタル

	不均衡による 対話の不成立	貧富の差による 対立	(社会関係資本)の減少 無縁化・孤独化の増加
--	------------------	---------------	---------------------------

図1-4 超高齢社会での不安 三要素

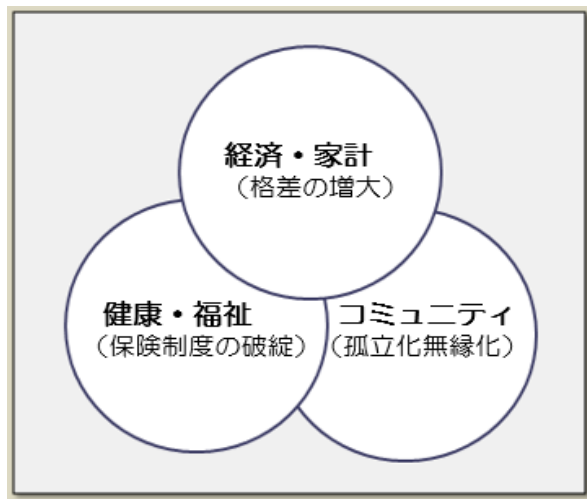
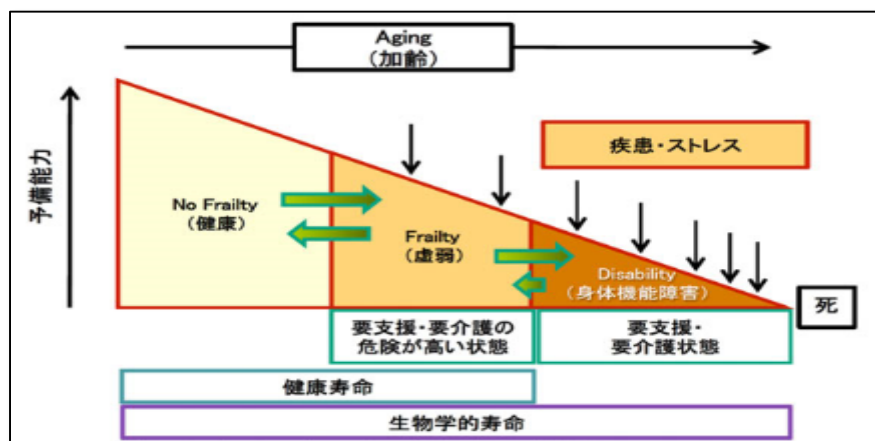


図1-5 超高齢社会での年齢と虚弱（フレイル）の関係



(出典：長寿医療研究センター病院レター)

2) AI・IOTの普及、第4次産業革命による社会の変化と課題

近年、AI（人工知能）、IOT（Internet of things:モノのインターネット）等、進化するIT技術は、製造業、流通業、サービス業等に幅広く活用され、生産コストと流通コストの極小化及び生産性の向上が進みつつあります。第4次産業革命では、IOTにより、様々なデータ（ビッグデータ）の活用が重要になりますが、決して無視できない「セキュリティ」の問題があります。またプライバシー保護に対する不安をいかに解消するかが課題と言えます。さらにAIによる自律型兵器や

殺人ロボットの開発と配置及び製造者責任・過失責任という面でのリスクも抱えています。さらに、「機械が人間の雇用を奪ってしまうのではないか」という議論や、将来自ら学び賢くなる AI に、人間が追いつけなくなった時、人類の歴史上、根本的な転換点「シンギュラリティ（技術的特異点）」が来るのではないかという懸念を抱く科学者もいます。しかし、医療の分野や介護、防犯・防災等の分野での活用が期待されています。

表 1 - 2 産業革命の歴史

産業革命	年代と特徴
第 1 次産業革命	18 世紀後半、蒸気・石炭を動力源とする軽工業を中心とする経済発展・社会構造の変革 イギリスで蒸気機関発明
第 2 次産業革命	19 世紀後半電気・石油を動力源とした重工業中心の経済発展社会構造改革 エジソン電球発明
第 3 次産業革命	20 世紀後半コンピュータを活用したマイクロエレクトロニクス革命（デジタル革命）生産ラインの自動化等
第 4 次産業革命	2010 年代～ すべてのモノがインターネットにつながる（IOT）、AI による様々な産業構造の変革、新たな経済発展

3) 地域のファスト風土化とまちづくりの課題

戦後の 1 次産業就労者の減少、首都圏を中心とした都市への人口流入により、日本では都市化が進みました。一方地方都市では過疎化が問題となっています。

そして、今後日本では急激な経済成長は見込めなく、現在はすでに定常状態に入っているとも言われています。

日本の人口減少、都市への人口集中は、空家や限界集落、衰退した商店街等の問題を引き起こしています。またユビキタス社会は「いつ、どこでも、何でも誰でも」が、スマホやパソコン等の情報機器で瞬時につながることにより、様々なサービスが提供され、生活を豊かにする社会といわれています。しかし反面地域のアイデンティティや多様性・文化の喪失、商店街のチェーン店舗化、ファスト風土化、均質化等「日本全国金太郎飴」への進行が懸念されています。